

2012/08/05 礼拝メッセージ 近藤修司 牧師

主 題：祈りをもって生きる

聖書箇所：ローマ人への手紙 15章30－33節

今日はローマ人への手紙15章30節から33節を見て行きます。

ここにはパウロの祈祷課題が記されています。パウロの祈りのリクエストです。30節に「兄弟たち。私たちの主イエス・キリストによって、また、御霊の愛によって切にお願いします。私のために、私とともに力を尽くして神に祈ってください。」とあります。パウロがローマの教会に、ローマのクリスチャンたちに宛ててこのような祈祷課題を記しました。「お願いします。」と言っているのは、何か弱いお願いではなくて、彼自身の非常に強い願いがそこに込められています。このことばは「促す、駆り立てる」などの意味を持ったことばで、パウロは敢えてそのことばを使っています。それは彼が祈りの大切さを知っていたからです。パウロ自身「祈りの人」でした。なぜなら、祈りの大切さをパウロは彼の主から学んだからです。主イエス・キリストが祈りの人でした。主イエス・キリストは祈りを大切にされました。

◎主イエスご自身が祈りの人であった

(1) 祈りの時間：

どんな時にでも！！

- ・朝早く＝マルコ1：35「さて、イエスは、朝早くまだ暗いうちに起きて、寂しい所へ出て行き、そこで祈っておられた。」
- ・夜通し＝ルカ6：12「このころ、イエスは祈るために山に行き、神に祈りながら夜を明かされた。」
(マルコ3：13－19)

(2) 祈りの人数：

また、だれとでも！！

- ・一人で＝ルカ9：18「さて、イエスがひとりで祈っておられたとき、弟子たちがいっしょにいた。イエスは彼らに尋ねて言われた。「群衆はわたしのことをだれだと言っていますか。」
(マタイ16：13－20、マルコ8：27－30)
- ・弟子たちと＝ルカ9：28「これらの教えがあってから八日ほどして、イエスは、ペテロとヨハネとヤコブとを連れて、祈るために、山に登られた。」

(3) 祈りの場所：

どんなところででも！！

- ・ヨルダン川で＝ルカ3：21「さて、民衆がみなバプテスマを受けていたころ、イエスもバプテスマをお受けになり、そして祈っておられると、天が開け、」
- ・山で＝マタイ14：23「群衆を帰したあとで、祈るために、ひとりで山に登られた。夕方になったが、まだそこに、ひとりでおられた。」
- ・荒野で＝ルカ5：16「しかし、イエスご自身は、よく荒野に退いて祈っておられた。」
- ・ゲッセマネで＝マルコ14：32, 33「ゲッセマネという所に来て、イエスは弟子たちに言われた。「わたしが祈る間、ここにすわっていなさい。:33 そして、ペテロ、ヤコブ、ヨハネをいっしょに連れて行かれた。イエスは深く恐れもだえ始められた。」
(マタイ26：36－41、ルカ22：40－46)
- ・十字架で＝ルカ23：34、46「そのとき、イエスはこう言われた。「父よ。彼らをお赦しください

い。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」彼らは、くじを引いて、イエスの着物を分けた。」「イエスは大声で叫んで、言われた。「父よ。わが霊を御手にゆだねます。」こう言って、息を引き取られた。」

このように見た時に、主イエス・キリストご自身は確かに祈りの人でありいつも祈っておられたことが分かります。どこでもだれとでも祈っておられた。そのことを知ったパウロは同じように、いつでもだれとでもどこでも祈る祈りの人として、信仰者としての歩みを歩み続けた訳です。彼の主がそのようであったように、彼自身もイエスの歩みに倣って祈りの人でありました。

問題は私たちです。考えなければならないことは、あなたがこのパウロと同じように、そして、今見て来たように、主と同じように祈りの人であるかどうかです。祈りを疎かにしていないかどうかです。R・A・トーレーという神学者がいます。彼はムーディ聖書学院の学長であったし、後にムーディ教会の牧師でもありました。そのトーレーがこんなことを言っています。「私たちはすべてのことに祝福された勝利の人生を歩みたいと願っています。しかし、現実の私たちはどうでしょうか？仕事や家庭や人間関係、あらゆる問題で悩み、苦しんでいます。これらのことが思うようにいかない最大の原因は、祈りの怠慢によるのです。ヤコブはこれらのことについてヤコブの手紙4章2節で次のように語っています。『あなたがたは、ほしがっても自分のものにならないと、人殺しをするのです。うらやんでも手に入れることができないと、争ったり、戦ったりするのです。あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです。』。このみことばは我々クリスチャンの信仰の貧困さと無力の原因を明らかにするものです。それは祈りを軽んじ怠っているからだ」とヤコブは指摘しているのです。多くのクリスチャンは『なぜ私の信仰生活は進歩が少ないのだろう？』と悩んでいます。神は『祈りを軽んじ怠っているからだ！あなたがたは求めないから得られないのだ！』と答えているのです。教会学校の教師は『なぜ子どもたちが救われないのだろう？』と嘆きます。神は同様に『祈りを軽んじ怠っているからだ！あなたがたは求めないから得られないのだ！』と答えているのです。多くの牧師、伝道師が『なぜ私の働きは実を結ばないのだろう？』『なぜキリスト教会は不信仰と罪惡のこの世に対抗し前進しないのだろう？』と嘆いています。神は『祈りを軽んじ、怠っているからだ！あなたがたは、求めないから得られないのだ！』と答えているのです。」と。

考えてみてください。私たちが神に祝福を求めるなら、祝福を与えてくださる神の前に祈らないでどうして得ることが出来ますか？神から平安を得ようとするならば、平安を与えてくださる神の前に静まることなくして、どうして平安を得ることが出来ますか？信仰の勇者たちは私たちに言います。「祈りの怠慢があなたの信仰の弱さの原因なのだ。」と。あなたはどれ位の時間を主と過ごしていますか？長さのことではなく質です。どれ程時間を取って神を見上げ、神を崇め神を誉め称えるかです。今日もデボーションを持ったからそれで良かったと、デボーションを持つことが目的になっているとするなら、私たちは大切なものを見落としています。神との時間が必要なのです。そのことを知っていたパウロは、このローマのクリスチャンたちに「ぜひ、祈って欲しい」と祈りの課題を提供するのです。みなに祈ってもらう必要があるのです。そのことを求める人たちは祈りの力を知っている者たちです。

パウロは今私たちが学ぶところで、どうして私たちは祈り合うのかということについて、三つの理由を上げています。

A. パウロが祈りを求めた理由 30節

なぜ、私たちは互いのために祈り合っていくのでしょうか？なぜ、私たちに祈りが必要なのか？私たちはなぜ、執り成しの祈りを為すことが必要なのか？

1. 同じ主に仕えているから

30節に「兄弟たち。私たちの主イエス・キリストによって、」とあります。パウロはこのローマの教会のクリスチャンたちに、これ迄この手紙を通して教えて来た「主について」、この方がどんなに偉大なお方であり、そして、あなたに救いを与えるためにどんなに大きな犠牲を払ってくださったのか、今一度そこに目を向けさせようとするのです。「**私たちの主イエス・キリスト**」と。その方を見上げる時に、私たちはこの方から多くの祝福をいただきます。その祝福の中の一つは、私たちはこのお方と自由に交わることができるということです。私たち信仰者はこの方の前にどんなことでも持っていくことができるのです。それを考えるだけでも私たちは祈りたいと思いませんか？私たちが交わることを赦されている方は「全能の神」です。この方の前に私たちはいつでも立つことが赦されているのです。このようなすばらしい特権を喜んでおられない信仰者がいるならば、大切なものを見落としています。私たちはこの神の前に立つことが赦されているのです。パウロがしようとすることは、今一度、読者たちの目をもう一度この主に向けさせようとするのです。この方と自由に交わることができる、我々はこの方の恵みによってこの方の子どもとされたのです。

我々信仰者はこの神との交わりを欲する者です。いつでもこの神とともにいたい！だから、私たちは祈るのです。祈り続けて行くのです。だから、すべてのことをこの方に話したいし、いつもこの方の知恵をいただきたいし、この方の助けをいただきたい。だから、いつもこの方の前に出て行くのです。パウロは再びそのことを思い起こさせるのです。私たちの主イエス・キリストによってと。

2. 同じ愛を共有しているから

30節に「また、御霊の愛によって切にお願いします。」と「御霊の愛」と言っています。パウロが言わんとしていることは、我々信仰者、イエス・キリストを信じる者、クリスチャンたちには神の愛が注がれているということです。思い出しませんか？ローマ5：5に「**この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。**」とあります。クリスチャンは数ある宗教の中からキリスト教を選んだという人ではありません。神によって罪赦されて、そして、生まれ変わった者たちです。ですから、彼らが生まれ変わったゆえに、その人のうちに神ご自

身の愛が与えられているから、その人は兄弟姉妹を愛する者へと生まれ変わるのです。兄弟姉妹を愛する者たちは、その人たちのことを考えるがゆえに、その人たちのことをいつも心に留めるゆえに、彼らのために執り成そうとするのです。

皆さんにもあるでしょう？主の前に立っている時に神がだれかのことを特別に重荷としてあなたに与えてくださることが…。この人のために祈ろう、この人がどうしているか気になるから連絡を取ってみよう、なぜ、そのようなことをするのですか？兄弟姉妹を愛しているからです。その愛はどこから来るのでしょうか？イエス・キリストによって救われた時にあなたのうちに与えられた聖霊なる神がその愛をもたらししてくれるのです。だから、パウロはローマのクリスチャンたちに祈って欲しいと言うのです。でも、同時にパウロは確信しているのです。彼らは私のことを覚えて祈ってくれているということ

を。
パウロも彼らのことを祈り、彼らもパウロのことを祈っています。私たちには同じ聖霊が与えられている、同じ神の愛が与えられている、だから、祈るのだ、だから、互いのために祈り合うのだということです。私たちには同じ愛が与えられているのです。

3. 同じ弱さを共有している

30節の後半に「**私のために、私とともに力を尽くして神に祈ってください。**」とあります。パウロは同じ主に仕えていること、そして、同じ愛を共有していること、それだけでなく、同じ弱さを共有しているとも言います。弱さのことです。というのは、「**私とともに力を尽くして**」ということばは、実は新約聖書にここしか出て来ないことばです。このことばの意味は「格闘」です。旧約聖書に記されていること、ヤコブがベテルにおいて神と格闘した、相撲をとった、レスリングをした、そういう意味を持ったことばがここで使われているのです。ある辞書によれば「祈りのレスリング、祈りの格闘」と定義しているものもあります。なぜ、こんなことをパウロが言ったのでしょうか？パウロ自身、信仰の勇者であっても祈りが難しいということを知っているからです。それは説明を聞かなくても私たちも分かっています。皆さんが神のみこころに沿って祈ろうとする時に、我々の肉がそれを妨げようとします。なぜなら、皆さんが祈りの人になっていくなら皆さんの信仰は成長するからです。そのようなことを望まない肉は、皆さんが祈りにおいて怠慢であり続けることを願って誘惑をするのです。だから、私たちは自分のことを祈ることも怠慢だったり、また、だれかのために執り成すことにおいても怠慢です。それを継続することは非常に難しいことを私たちも知っています。パウロもそれを知っているのです。ですから、パウロは言うのです。「私のためにいっしょになって格闘してください。私は弱いから、祈りを必要としているから、いっしょになって格闘して欲しい。」と。

パウロは彼らに祈りを求めますが、同時に、自分自身の弱さを知っています。皆さん、私たちはもうそのことには十分気付いているでしょう？神との歩みにおいていかに私たちが不忠実であるか。どのように日々歩んでいますか？あのイギリスの著名な大説教家であるスポルジョンはこのように言っています。「私たちは食べることも、店のシャッターを下ろすことも、仕事も、寝床で休むことも忘れませんが、祈りで神と格闘することは忘れるのです。父なる神との聖別された交わりのために時間を捧げることが忘れるのです。世界のために過ごす時間、キリストのために過ごすひとときを！この世に最も良い時間を充て、祈りには余った時間を充てているのです。富のためには持てる体力と活力を注ぎ、神のためには疲労と倦怠を注いでいます。」と。私たちにとって一番大切なことは何ですか？神の前に静まってこの神の前に祈ることであると。私たちはそれ以外のことは熱心にするけれど、一番大切なことに関して怠けていると言うのです。「私は怠けてはいないけれど、余りにも日々の生活が忙しすぎて…」と言う人もいるでしょう。余りにも忙し過ぎるのは良くないことです。忙し過ぎることによってついつい神との時間が後回しになってしまうからです。忙しさの中で犠牲にされた時間が神との時間であったり、犠牲にされた人が神であったりと、そのような信仰生活が神に喜ばれるはずはありません。そのことは私たちはもう十分知っています。

かつての信仰の勇者のことばを聞いてください。E・M・バウンズという人がいます、彼は弁護士を目指していましたが、後に牧師として働きを為した人です。彼はこう言っています。「イエス・キリストはいつも奉仕で忙しくしておられましたが、忙し過ぎて祈れないということは決してありませんでした。…忙し過ぎて祈らない宗教はクリスチャンに霊的な死をもたらします。それに合理的な理由があっても、それはクリスチャンを霊的に殺します。」と。非常に厳しいことばですがそこには真理があります。先ほども話したR・A・トーレーは「祈りを軽視し、祈りに時間を費やすことのない者は、キリストに従う者とは言えないのです。」と言っています。このような信仰の勇者たち、神が大いに祝して大いに用いられた人々が言うことは、私たち信仰者として最も大切な時間は、この主との交わりの時間であり、祈りの時間だということです。その時間を持たずしてどうして神の前に立つことができるかと言います。最初にも話したように、神の栄光を現わしたいならその助けをくださる神の前に出なければいけ

ません。神を喜ばせたいなら、神が喜んでくださることをしなければいけません。私たちは私たちの弱さを知っています。実際の弱さはあなたが知っている以上です。だから、私たちはいつも神の前に行かなければいけないのです。人々と会う時には神の知恵が必要だから神の知恵を求めないといけません。日々の生活を為すに当たって、私たちの為すことも考えることも、すべてにおいて神に喜ばれるためには、その助けをくださる神の前に助けを求めなければいけないのです。

信仰者の皆さん、なぜ 私たちの信仰がそんなに弱いのか？いつまで経っても成長しないのか？理由はあなたにあるのです。神との時間がないからです。みことばを学び、神の前に心注いで祈る時間がなければ信仰の成長など見ることはできないのです。キリストのように変わっていかないのは、神に原因があるのではなくて、あなたの歩みに原因があるのです。それがみことばが教えていることです。そして信仰の勇者たちは、神が大いに用いた信仰の勇者たちは、主イエス・キリストの歩みに倣って祈りの人になったのです。そして、神は彼らを大にお用いになったのです。

なぜ、互いのために祈り合っていくことが必要なのか？そのことを語ったパウロは今度は 31 - 32 節に「祈りの課題」を三つ挙げています。

B. 祈りの課題 31 - 32 節

1. エルサレム訪問が守られるように 31 節

1) ユダヤにいる不信仰な人々から救い出されること

自分のエルサレム訪問が守られるようにと祈りを求めました。31 節に「私がユダヤにいる不信仰な人々から救い出され、」と書かれています。「不信仰な人々」とは「救われていないユダヤ人」のことです。救われていない人は神に対して不従順だからです。ですから、エルサレムにいるイエスの救いを信じていないユダヤ人たちのことを言っているのです。このような人々から救い出されるようにとパウロは言います。「救い出され、」とはどういうことでしょうか。「危険から守られて少しでも長生きするように」と、そのようなことをパウロが祈ったのではないことは明らかです。大変な危険があるからその中で「どうぞ、私のいのちが守られて、そして、私が少しでも長く生きられるように」と、なぜ、そのように望んでいなかったのか？パウロ自身のことばを見れば明らかです。

まず、パウロはエルサレムに行くことが自分にとって大変危険が伴っているということを知っていました。使徒の働き 20 章 22 - 23 節にそのことが記されています。「いま私は、心を縛られて、エルサレムに上る途中です。そこで私にどんなことが起こるのかわかりません。:23 ただわかっているのは、聖霊がどの町でも私にはっきりとあかしされて、なわめと苦しみ私を待っていると言われることです。」、「なわめと苦しみ」とあります。パウロは知っていたのです。私は必ず捕えられて「なわ」で縛られるということ...このことばは牢に投獄されるという意味もあります。そのようなことがあるだろうと彼は確信していました。様々な苦しみ、困難があることを知っていました。それを知った上で、パウロは自分のいのちが惜しいとは思っていません。使徒 21 : 13 にはこのようなパウロのことばが記されています。

「するとパウロは、「あなたがたは、泣いたり、私の心をくじいたりして、いったい何をしていますのですか。私は、主イエスの御名のためなら、エルサレムで縛られることばかりでなく、死ぬことさえも覚悟しています。」と答えた。」、このようにパウロは死ぬことを全く恐れていません。では、ローマ 15 : 31 で言っている「救い出される」とは何を意味しているのでしょうか？これはパウロがエルサレムに行った時に、神が望んでおられる働きを妨げられることなく成し遂げることをパウロが望んだということです。パウロが望んだことはただ一つ「私は神のみこころに従って歩んで行きたい。そして、神が私をエルサレムに

遣わしてくださるなら、私はそこで為すべきことを為し終えたい。そのために祈って欲しい。」です。この信仰にこの神に反対する者たちがいる、逆らう者たちがいる、彼らは間違いなく私を苦しめ、私を様々な形で迫害するだろうけれど、神のみこころが為され、そこで私が語るべきことを語り、為すべきことが為されるように、そのために助けを求めて欲しいと言うのです。パウロはこれまでもそうでしたし、この後もそうです。彼は一つのことしか望んでいません。それは主のみこころを為し終えることです！どこにあっても彼が望んだことは神のみこころに従って生きていきたい、神を喜ばせることをしていきたいと、そのことしかなかったのです。自分のためなどどこにもなかったのです。なぜなら、イエス・キリストに従う者たちは自分を捨て自分の十字架を負って従う者たちだからです。生まれ変わった私たちは生き方が変わるのです。この神を喜ばせるために何をしていったら良いのか、そのことはこのローマ書の中でパウロが繰り返し教えていることです。パウロが望んだことは、エルサレムに行った時に為すべきことが妨げなくしっかりできるように祈って欲しいということでした。

2) エルサレムについてからの実際の出来事

では、この祈りはどうなったのでしょうか？使徒の働きを見て結論から言うと、この祈りは答えられています。どのように答えられたのか？パウロがエルサレムに着いたとき、エルサレムは大変な騒動になっていきます。なぜ、そのようなことになったのか？使徒の働き 21 章にアジアから来たユダヤ人たちが

が群衆をそそのかしてパウロの殺害を謀った様子が、使徒 21：26 から記されています。確かに、パウロ自身が予想していたように、エルサレムに着いたとき、イエス・キリストを憎んでいる不信仰なユダヤ人たちから迫害を受けました。エルサレム中が大変なことになったのです。「宮を汚した」と言ってパウロは責められ、千人隊長が出て来るという事態になるのです。

また、使徒の働きの 23 章を見ると、パウロを殺すまでは飲み食いをしていないと誓った 40 人以上のユダヤ人たちのことが出てきます。彼らはパウロの暗殺計画を立てたのです。何とかパウロを殺そうとするのです。みことばが教えるのは、そのことを知ったパウロの姉妹の子どもの報告によって千人隊長はパウロを殺そうとしていた人々の手からパウロを守って、パウロをカイザリヤへと送って行きます。そのことが使徒の働き 23：12－35 に記されています。ですから、このようにパウロはこの不信仰な人たちから守られるようにとローマの人々に願いました。そのようにパウロの働きは守られて、そして、使徒の働き 25 章 10 節から書かれているように、パウロはローマ皇帝カイザルに上告することによってローマへと送られていきます。これも彼が願ったことでした。そのことはこの後見て行きます。

ですから、パウロはローマのクリスチャンたちに祈って欲しいと願い、感謝なことに、神はその祈りに答えてくださった。パウロはエルサレムに行き、そこでの働きを神の助けによって為し終えることができたのです。パウロが最初に祈り求めたことは「エルサレム訪問が守られるように」であり、その祈りは聞かれました。

2. エルサレム訪問が用いられるように 31 節

31 節「またエルサレムに対する私の奉仕が聖徒たちに受け入れられるものとなりますように。」、「受け入れられる」ということばは新約聖書に 5 回しか出て来ないことばです。それをパウロは使っています。それぞれの訳を見ると、

・ ローマ 15：16 「それも私が、異邦人のためにキリスト・イエスの仕え人となるために、神から恵みをいただいているからです。私は神の福音をもって、祭司の務めを果たしています。それは異邦人を、聖霊によって聖なるものとされた、神に受け入れられる供え物とするためです。」、ここでは「受け入れられる」と同じように

訳されています。

・Ⅱコリント 6：2 「神は言われます。「わたしは、恵みの時にあなたに答え、救いの日にあなたを助けた。」確かに、今は恵みの時、今は救いの日です。」、ここでは「恵みの」と訳されています。

・Ⅱコリント 8：12 「もし熱意があるならば、持たない物によってではなく、持っている程度に応じて、それは受納されるのです。」、「受納」と訳されています。

・Ⅰペテロ 2：5 「あなたがたも生ける石として、霊の家に築き上げられなさい。そして、聖なる祭司として、イエス・キリストを通して、神に喜ばれる霊のいけにえをささげなさい。」、ここでは「喜ばれる」と訳されています。

さて、このように訳されていることばをパウロはここで使ったのです。ということは、パウロは何を願ったのか？パウロがエルサレムを訪問した時に、エルサレムの人々によって、エルサレムの教会によって私の訪問が喜ばれ、そして、私の訪問が彼らにとって益となることです。だから、彼らは私を歓迎してくれる、私の訪問を喜んでくれる、そのことをパウロは祈り求めたのです。私がエルサレムを訪問することがエルサレムの教会の人たちにとっての祝福になりたいと願ったのです。私たちもそのことを願いませんか？皆さんがどこかを訪問するとして、その訪問によって神が喜んでくださるだけでなく、訪問したその相手が喜んでくれることを…。パウロはただ何となくエルサレムを訪問しますと言ったわけではありません。私が行くことで彼らの祝福になりたいと願ったのです。どうなったでしょう？実は、この祈りも答えられています。みことばはそのことを私たちに教えてくれます。

使徒の働き 21：17、19、20を見てください。「17 エルサレムに着くと、兄弟たちは喜んで私たちを迎えてくれた。…19 彼らにあいさつしてから、パウロは彼の奉仕を通して神が異邦人の間でなされたことを、一つ一つ話した。20 彼らはそれを聞いて神をほめたたえ、パウロにこう言った。「兄弟よ。ご承知のように、ユダヤ人の中で信仰にはいっている者は幾万となくありますが、みな律法に熱心な人たちです。」、パウロが願っていたように、エルサレムの兄弟たちは喜んで迎えてくれたと言います。多分、このときパウロは喜んだことでしょう。「神さま、感謝します。」と言ったことでしょう。祈りが聞かれたと…。そして、パウロは長老たちと交わりをするのですが、ヤコブを含めて長老たちの前で神の為さったすばらしいみわざについて話を始めると、「彼らはそれを聞いて神をほめたたえ」たのです。パウロの訪問が彼らの祝福になったのです。パウロがエルサレムを訪問することによって、エルサレム教会は神が為さっておられる異邦人の間でのみわざを聞いて、神をほめたたえたのです。エルサレム教会にあって「神さま、感謝します」という喜びの聲が沸き上がったことが私たちにも想像出来ます。こうしてパウロの二つ目の祈りも答えられました。

3. ローマ訪問が実現するように 32節

三つ目に彼が求めたことはローマ教会を訪問することです。この訪問が実現することをパウロは祈り求めました。32節に「その結果として、神のみこころにより、喜びをもってあなたがたのところへ行き、あなたがたの中で、ともにいこいを得ることが出来ますように。」とあります。私がローマのあなたがたのところを訪問する時には私は喜びをもって行きたい、なぜなら、いっしょに集まって神を称えるためです。パウロは「いこいを得る」という面白いことばを使います。このことばは「いっしょに休む、休息を取る、ともにリフレッシュする」ということです。もちろん、このリフレッシュ、休息とは肉体的なりフレッシュや休息のことではないのは明らかです。どちらかというと信仰のことです。信仰において休息を得

たい、信仰においてリフレッシュしたい、励まされたいと、パウロはそのことを望んでいました。ローマ書1章から、パウロはそのことを記していました。そしてその祈りは聞かれるのです。

使徒の働き28：14－16に「ここで、私たちは兄弟たちに会い、勧められるままに彼らのところに七日間滞在した。こうして、私たちはローマに到着した。:15 私たちのことを聞いた兄弟たちは、ローマからアピオ・ポロとトレス・タベルネまで出迎えに来てくれた。パウロは彼らに会って、神に感謝し、勇気づけられた。:16 私たちがローマにはいると、パウロは番兵付きで自分だけの家に住むことが許された。」とあります。パウロたちはやっとローマに来たのです。そして、ローマのクリスチャンたちがパウロを迎えに来てくれるのです。「パウロは彼らに会って、神に感謝し、勇気づけられた。」とあります。先ほど私たちが見たように、パウロはローマの訪問を願い、そのとき「私は喜びをもって行きたい。そして、あなたたちといっしょに私は信仰において励ましを得たい。信仰が再び喜びにあふれるようにリフレッシュしたい」と願ったのです。そのことがまさに実現しました。「神に感謝し、勇気づけられた。」というのは、皆さんも覚えておられるでしょう。このローマの兄弟姉妹たちは信仰的に大人でした。彼らはいつも神を見上げて、神に喜ばれることを考えていたのです。そのようなクリスチャンたちと交わる時に私たちの信仰は励まされます。この世のことしか考えていないクリスチャンと交わると私たちの心は痛みます。でも、神の恵みをともに分かち合い、神のすばらしさをともに分かち合う時、私たちの心は喜びにあふれていきます。なぜなら、喜びは神から与えられるものであり、私たちの心が神の方を向いていなければ、神の前に正しくなければ、喜びを得ることはできないからです。

ですから、いつも神を見上げて神の前を正しく歩んでいる人たちは、主にあって成長し、キリストに似た者に変えられ、そして、神によって祝されています。そのようなクリスチャンたちと交わる時に、私たちの心は励まされます。私たちが主イエス・キリストにお会いして、イエスの御顔を拝し、イエスの歩みを見て、イエスのおことばを聞いたら、私たちの心はどれ程励まされることでしょうか？確かに、今、私たちはイエスを見ることはできません。しかし、イエスは信者であるあなたを通してご自身を明らかにされていきます。人々は確かに今も、あなたを通してイエス・キリストを見るのです。ですから、イエス・キリストのことが明らかに示されている、つまり、霊的な信仰的なクリスチャンたちと交わる時に私たちの信仰は間違いなく励まされます。そこで皆さんにチャレンジしなければいけません。皆さん、そのような人を探すことも必要でしょう。でも、大切なことは、あなたがそういう人になることです。みことばを聞いて、ただそれだけであったら何の変化も訪れません。しかし、あなたがみことばを実践する者になっていく時に、初めて神があなたのうちに働きを始められ、変えられて行くのです。信仰生活を難しくしているのは神ではなく私たちです。主が「これをしなさい」と言われた。そして、それを実践するために「わたしは必要な助けを備えた」と言われます。でも、私たちはそのことを疑うのです。いつまで経っても変わって来ない、私たちの口から神への賛美とのろいが出て来る...と。ヤコブが警告したことが私たちのうちに起こっているのです。悲しいことに、そのような信仰者と交わっているなら私たちの心は痛んで来ます。もし、あなたがそのような信仰者に甘んじているなら、今、その生ぬるい信仰生活から立ち直ることです。主の前に正しく歩んでいこうという決心をもって正しい歩みを始めることです。

パウロはこうしてローマの愛する兄弟たちに祈りの課題を提供しました。感謝なことに、主はその祈りに答えてくださったのです。信仰者の皆さん、あなたの弱さやあなたの愚かさはあなた以上に神は知っているのです。それを知った上で、あなたを変えてくださるのです。だから、祈りというのが私たちの信仰生活においてなくてはならないものなのです。今まで以上に、もっと神の前に出て行くことが

必要なのです。神の助けがいつもいるのです。なぜなら、私たちは失敗の連続ではないですか？神を悲し

ませるものの連続ではないですか？だから、いつも神の助けをいただきながら生きて行かなければならないのです。そのようにして私たちは生きて行くのです。信仰の勇者たちはそのようにして生きて来たのです。私たちが覚えなければいけないこと、また、しっかりと心に刻まなければいけないことは、主は祈りに答えてくださるということです。あなたに助けをくださるということです。その方の前に私たちはいつも出て行かなければいけないのです。

C. 祝祷 33節

最後の33節にはパウロの祝祷が記されています。「どうか、平和の神が、あなたがたすべてとともにいてくださいますように。アーメン。」、この祝祷の中でパウロは「私たちの神は平和の神である」と言っています。なぜ、こんなことを言ったのか？「平和」ということばは「平和」とも訳せるし「平安」とも訳せることばです。パウロが言いたかったことは、神との平和を持つにも、また、神にあって平安を持ち続けて行くにも、そのすべての力ぎは神だということです。なぜなら、この「平和」も「平安」も神がもっておられるものだからです。ですから、私たちがそのような平安を持って神の前を歩み続けて行くためには、平安の源である神の前に出て行かなければいけないのです。神との平和を得たいと思うなら、平和をくださる唯一の救い主である神の前に出ていかなければいけないのです。いずれにしろ、平和であり平安の源は「神」だと言っているのです。

ヨハネ14：27のことばを思い出しませんか？「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。」、また、ヨハネ16：33でも「わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を持つためです。あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。」、神はあなたが神の平安をもって日々歩むことを望んでおられ、そのために必要なことをしてくさるのです。でも、それを求めて出て行かないのは私たちなのです。その結果、私たちはいろいろなことで思い煩い、不安の中を生きているのです。いったい、いつになったら私たちはこの神を神として崇めて、この神にすべてをゆだねて、そして、神の与えてくださる平安をいただいて生きるのかです。心配するなら、解決をくださる神のところに行かなければいけないのです。自分で心配するならどんどん不安になっていきます、なぜなら、私たちは自分の心に平安をもたらすことはできないからです。平安の源は神です。ですから、パウロはその神があなたたちに祝福を与えてくれるようにと、そのように最後の祝祷で言うのです。私

たちはこのような祝福をいただいているのです。平安をくださる神が私たちの神なのです。世が与えることのできない平安をもって私たちは生きて行けるのです。だから「神の前に出て来なさい！」と言われるのです。

頭で分かっているけれども私たちはなかなか神の前に出て行こうとしません。「自分でやって行きます、大丈夫です。」と言いますか？私たちはその傲慢さを捨てなければいけません。私たちの神は不可能を可能にすることのできる神です。どんなことでもこの方のみこころならば成ります。目覚めてください、信仰者の皆さん！それが私たちの神だということに…。

この間、私の友人からこのようなメールをいただきました。宣教師の友ですが、このようなことが起こったと非常に考えさせられるメールだったので、皆さんにもご紹介したいと思います。これはアフリカの一人の女性が書いたものです。

「私が13歳だった時のことを覚えている。私は兄弟たちと遊び、そして、母の足元でいろんな物語を聞いた。人生は問題もなくすばらしかった。しかし、私の人生は一晩にして変わった。ある日会ったことのない年老いた一人の男が父の元にやって来た。彼らは一日中酒を飲み笑い、夜遅くまで話し込んでいた。それが私について、私が花嫁になる話だとは思ってもみなかった。結婚式は短く簡素なものだった。次の日、私は自分の家族に別れを告げた。昨日まで会ったことのなかったこの男が、私を彼の村へと連れて行った。彼は私の父に大金を払い、今、私はこの夫の所有物となったのである。私はとても孤独でホームシックになった。出産がその後何度となく続いた。夫は子どもたちには全く関心を払わなかった。そして、しばらくすると夫は暴力を振るうようになった。彼が他の女性のところに通わずに酔っぱらって帰って来た夜は私に暴力を振るった。私は夫の暴力にも、病気になることにも、また出産にも疲れ果てていた。私は自由になりたかった。しかし、脱出の方法は皆無であった。ある日、夫は私の育った村からラジオを所有している一人の男性を家に連れて来た。ラジオを所有しているのは裕福な村人だけだった。その彼が私に私専用のラジオをくれたのだった。その素敵な贈り物に私は興奮した。この男性は彼の村では「イエス」という方のことを人々が話していると教えてくれた。彼はその番組を聞くためにラジオの操作方法を教えてくれた。私は毎週その番組を聞いた。ラジオで話している人々に私は共感を覚えた。私の村では人々は女性は無価値な者だと考えていた。しかし、このラジオで話している人々は「私は価値がある存在だ」と語ってくれた。ラジオを通して、子どもをどのように育てるのかを私は学んだ。イエスの話は私の痛みを癒し希望を与えてくれた。私の生活の環境は変わらなかった。でも、私の恐れと悲しみは消え去った。私は私の子どもたちに歌を聴かせ、聖書からの話をしてあげた。夫は私への暴力を止めなかったが、泣く代わりに私は彼に微笑んだ。そして、ある日のこと、私は戸口のところに陰を見つけた。それは夫だった。彼はそこにたたずみただ私を眺めていた。彼は声を荒げることも暴力を振るうこともなかった。暫くたってから夫は私に「マラ、赦してくれ」と言った。私はそのことばを聞いた時に信じられなかった。なんと夫は私がラジオを聞いている間、窓の外に座り込んでいたのであった。彼は赦しを与えてくださる神について学び、そして、私の赦しを求めたのであった。夫は神が私を変えられたのを見て、この神なら彼を変えてくださることを確信したのであった。神は私の祈りに答えてくださった。」と。

神はこのような力を持った方です。不可能と思えることをみこころなら可能にしてくださるのです。忘れていませんか？そのような神があなたの神だと言うことを！！その方の前に私たちは出て行って、そして、その方の前に祈れるという特権をいただいているがそのことを忘れていませんか？

かなり前ですが、私は私の信仰のヒーローと会うことができました。ピーター・ダイナカという人物でした。彼は1934年に「スラブ人福音協会」というスラブ人に宣教をする宣教団体を始めた人物です。今この宣教団体は2月にここに来られたプロボースト先生のお父さんがその代表を務めています。このピーター・ダイナカ、彼はこんなことを言っています。「私は長年に亘り、キリストが私に勝利を与えてくださったこと、また、幸せで祝福されたクリスチャン生活を送れたことを神に感謝する。キリスト・イエスによって私は平和を喜びを、そして、たましいの休息を見出した。私は勝利あるクリスチャン生活を送るための秘訣は、多くの祈りを通して主との交わりを持ち続けること、維持し続けることだと学んだ。」と。続けて、彼は言います。「すべてのクリスチャンは祈りに多くの時間を費やさなけれ

ばならない。神によって大いに用いられたすべての人々は祈りの人々であった。彼らは多くの時間を祈りに費やした。D・L・ムーディ、C・T・スタッド、ハドソン・ティラー、ジョージ・ミューラー、そして、多くの人々は、祈りにおいて主にお会いするために朝早くに起床した。彼らが多く祈ったので、神は彼らにより多くの力や知恵や勝利を与えられた。...もし、クリスチャンが祈りのために時間を取らないなら、彼らがいかに有能で才能があるうとも、彼らは神の力に欠けるであろう。私たちは祈りの男性、祈りの女性にならなければならない。」と。

あなたは祈りの男性ですか？祈りの女性ですか？神は私たちに勝利をくださったのです。でも、勝利者として生きて行くためには、勝利の源である神に助けを求め続けて行かなければいけない。そうして我々は生きるのです。かつての勇者たちはそのようにして生きて来たのです。だから、神が使ったのです。今、私たちはこのパウロの祈りを見る時に「祈りの大切さ」を覚えることです。祈りがなければ神の力をいただくことなど不可能です。事が上手くいっているからそれで良しではないのです。神の祝福をいただくためには、私たちは神の前にひざまづいて神の前に助けを求めなければいけないのです。教会に必要なのはプログラムではないのです。教会に必要なのは、ひざまずいて主の前に祈る、そのような神の力を信じ切った人々です。あなたはそのような人でしょうか？もしそうでなければ、今日からそういう人として生きてください。そんな人が必要なのです。主を主として見上げて、崇めて、信頼を置いて生きる人々です。そんな信仰者として今日からあなたが歩んでくださることを心から願います。神に信頼する人として、あなたが今日から歩まれることを心から期待します。

《考えましょう》

1. 私たちにとって、祈りが必要な理由を挙げてください。
2. 祈りの必要を感じなくなっていく原因は何だと思えますか？
3. 祈りながら日々を過ごすためには、どうすれば良いでしょうか？
4. あなたは今日からどのような祈りの生活を始められますか？